

4. 資料目録

石井素介「参謀本部大陸第七課作成の兵要地誌図資料」

明治大学名誉教授の石井素介先生が、第二次世界大戦末期の1945年4月から終戦時まで研究動員学徒として、参謀本部で兵要地誌に関する研究作業に従事されていた時に入手された資料に関する注記と目録で、石井先生ご自身による。また、この目録の資料14の裏に印刷された、昭和15（1940）年度中と思われる地図に関する計画（全4葉）を付す。

小林 茂・多田隈健一・顧 立舒「石井素介先生旧蔵の『参謀本部大陸第七課作成の兵要地誌図資料』—解説と詳細目録—」

石井素介先生は、「参謀本部大陸第七課作成の兵要地誌図資料」を外邦図研究資料として大阪大学文学研究科人文地理学教室にご寄贈下さった。本資料は、外邦図研究資料としてだけでなく、第二次世界大戦末期における兵要地誌編集作業の一端を示すとともに、学徒動員に関する資料としても重要な意義をもつと考えられる。石井先生の解説と目録は要を得たものであるが、こうした多面的活用を意識して簡単な解説と詳細目録を示す。

小林 茂・小嶋 梓・多田隈健一・顧 立舒「日清・日露戦争期に臨時測図部が中国大陸で作製した地形図（大阪大学蔵）—解説と目録—」

日清・日露戦争期は、日本が海外ではじめて大規模な測量活動を開始した時期に当たり、これまで台湾や朝鮮半島については一定の研究があるが、中国大陸についてはほとんどなかった。古書店を通じて購入した二万分の一地形図について、解説と目録を示す。

参謀本部大陸第七課作成の兵要地誌図資料

〔注記〕

この大型紙袋入りの手書き彩色地図類は、1945年8月の終戦時に、参謀本部（大本営陸軍部）の第二部第七課（通称大陸第七課）において、当時東京大学の地理学教室から派遣され研究動員学徒として勤務していた藤井(石井旧姓)素介が、上司から自宅で保管しておくようにと手渡されたものである。その詳細な経緯は記憶に残っていないが、その当時、焼却用の廃棄処分資料として廊下に積み上げられていたものの中から適当に選び出して、「敵さんの側に渡すわけにはいかないが、将来何かの役に立つかもしれないから君たちの家で預かっておいてくれ」というようなことを言われて渡されたのを覚えている。内容的には、何かの作戦会議等で既に御用済みのもので、それほど大事な機密資料とは思われないが、第七課の職員が苦勞して作成した成果なので捨てるに忍びなかったのであろう。また、同課で自分自身が担当していた作業結果や関係資料も同時に持ち帰った。何れも断片的なものではあるが、当時の日本陸軍の兵要地誌部門が担当していた仕事の一部を、具体的に示す研究資料として今後活用されるよう期待したい。

I 上司より預かった資料

〔紙袋の表書き〕 〈赤筆〉 浙東及江北沿岸地区/空海基地説明図/大陸第七課

<茶鉛筆>支情学報/ 46号：支那沿岸島嶼概況図表

47号：浙東沿岸地区空海基地概況判断図表

〔内容物一覧〕

【1】 <表題>「江北沿岸地区空海基地概見図」（約155×153cm）

<基図用紙>1/30万支那沿岸陸海編合図・経緯度記入（全17枚中の7・8・9号

図3枚の貼り合わせで、北は海州付近から南は呉淞(ウースン)・蘇州付近までを含む)。なお、裏白紙利用の一枚は、小縮尺のニューギニア島図を使用。

<貼付け説明文>「地区の地理的特質」として、海岸線・陸地・飛行場適地について箇条書き。

<彩色の線・面部分の手書き記入事項>

〔黄色面〕棉花農場範囲:概シテ砂質壤土=飛行場設置ノ最適地ナリ

〔茶太線〕范公堤ノ線=棉花地帯ト水田地帯トノ概略境界

〔緑太線〕乾湿田地帯ノ概略境界ト見做シ得

<大型記号>井桁記号：飛行場（既設：紫色=我ガ方・赤色=敵側、黄色=候補地）

<海深線> 黒実線：海岸線

緑点線：7m等深線=駆逐艦及浅吃水艦(5-6m)ノ近接概略線

茶色線：10m等深線=巡洋艦及一般輸送船ノ近接概略線

青色線：15m等深線=戦艦・航空母艦級ノ近接概略線

赤色線：20m等深線=潜水艦ノ浸沈航行可能概略限界

なお、裏面に大赤字で「堤中佐」との記入あり。

【2】

<表題>「浙東海岸地区空海基地（ここに「判断」と追加記入あり）概見図」

昭和 20 年 6 月 大本営陸軍部（約 150×110 c m）

<基図用紙> 1/30 万支那沿岸陸海編合図 第 9+10 号図（上海～温州湾）

<記入事項> 少なし（水深線・飛行場関係等のみ）

【3】

<表題>「太岳地区兵要地誌要図」（山西南部の汾陽・大原・平陽・彰徳地区）

<基図> 東垂 1/50 万・西九行・北一・二段図(民国製 1/5 万図・編成 1/10 万図使用)

<上刷り文字>（昭和 18 年 8 月 25 日 乙集団参謀部）

[赤太字] 1 地形一般、2 道路、4 宿営休養、5 衛生、6 民心の動向、
7 地図ノ使用 [青線] 3 河川

【4】

<表題>「晋西北地区兵要地誌要図」（上記【3】の北側接続地区の図）

昭和 18 年 9 月 15 日（その他は、上記に同じ）

【5】

<表題>「四川及陝西正面主要交通網図」（華中内陸中央部の小縮尺図）

<基図> 1/100 万多色刷り中国大陸航空図 4 面貼合(含延安・成都・齊南・南京)

<記入事項> 各種交通路線・水路(含距離表)・飛行場（既設の大中小型区分・
敵側(赤色)我が方(青色)区分・候補地・不時着用地等を記入）

【6】

<表題>「敵側地区主要鉄道諸元」（墨筆大書による一覧表）

<内容> 昆明・西安・広東・衡陽・貴陽方面の 6 路線の概要表

【7】

<表題>「既往ニオケル熱河山地地誌資料（参考迄）」

<内容> 山地地形・平地における通行障害・道路・河川の概況等の記述

【8】

<表題>「滇越黔桂地区主要交通網図」

<基図> 1/100 万航空図 昭和 20 年 3 月 大陸第七課作成

【9】

<表題>「福建省及東部広東省主要交通網図」 〈上記とほぼ同じ〉

【10】

<表題>「支那沿岸主要島嶼位置概見表」（書類と付図）

<内容> 付表：空海基地説明概見表

付図：支那沿岸主要島嶼概見図

付図：島嶼の比較参考図

【11】

<内容> 1/10 万兵要地誌図を貼り合わせたもの（破れる寸前状態）

以上、預かり資料分 11 点。

II 藤井(現姓 石井)が自分で担当した作業結果と準備作業記録

【12】

<表題> 「西北(支那)諸民族分布並ニ利用価値判断図」 (昭和 20 年 5 月作成)

<基図> 昭和 18(1943)年 6 月陸地測量部調整・製版、中国大陸全図(1/400 万?)

地名は漢字とカタカナで右から表記、水系は青色印刷。

<民族分布> 色別に民族種別の概略分布区域を表現、「混合地域」は 2 色斜線、「分散或ハ出没地区」は単色斜線、「中共勢力圏」は赤色斜線で表現。

<利用価値> 単純化した用語(含・差別語)による箇条書き要旨を記入し貼付。

図の下段に「西北諸民族の省・地域別人口分布構成表」を追加貼付。

【13】

<表題> 「西北諸民族調査資料」 (上記判断図作成のための準備作業記録)

<内容> 民族の分布・人口構成・勢力圏等の概況につき既存文献から抜粋記録。

鳥居龍蔵・橋本増吉・江上波夫・岩村忍氏らの調査資料・講演記録等による。

【14】

<表題> 「武漢反攻關聯地区主要河川輸送能力判断表」 (昭和 20 年 8 月)

<内容> 大判用紙に一覧表化した表記の「判断表」と、これを作る過程で準備した諸資料。その多くは陸軍の雑用紙を使っているが、一部に軍用記録の裏面を使用したものがあり、その裏面の一部に、奥地に進出した現地軍に対して、極力敵側製作の地図を鹵獲するよう要求・奨励する記述等も見られる。

III 同課で作業していた他の動員学徒仲間の作成した資料(偶然同じ袋に在中)

【15】

<表題> 「黄河流域住民の概況一覧表」

「苗族ノ概況ニ就イテ」及「苗族分布図」

「蛋族ノ概況ニ就イテ」

【付】

「大陸第七課ヨリ地図業務ニ就イテノ通達」 (コピー)

以上

2011 年 5 月 15 日 石井素介記

昭和15年度と推定される日本陸軍の地図整備計画

A

參謀本部「外地地圖業務ニ就テ」(通達ラシキモノ)(作業用紙(表面より)見) 2011/5/7

第四、地圖業務ニ就テ

一、地圖整備ノ現況

作戰用地圖ハ五十萬分一編纂圖十萬分一地形圖ヲ基本圖トシ五萬分一圖、二萬五千分一圖等ノ大梯尺ハ相當廣範圍ノ局地圖トシテ整備スル方針ヲ堅持シテアリ尙用途ニ應ジ各種梯尺圖ヲ準備スヘシ地圖整備ノ現況ノ細部ハ參謀本部發行機秘密地圖一覽圖並整備ノ進捗ニ伴ヒ隨時ニ發行セル地圖一覽圖ニ依リテ承知セラレ度

參考ノ爲若干ノ參考書類ヲ配布スヘシ

ニ、來年度ニ於ケル地圖ノ整備要領

ノ測量關係ニ就テ

イ、滿洲測量

滿洲測量第二次四ヶ年計畫並昭和十五年測量計畫ハ關東軍トノ連絡ヲ終了シ成案ヲ得タルヲ以テ昭和十六年度豫算書呈出時機又ハ豫算決定時機ヲ待ツテ陸軍省ニ交渉スル豫定ナリ

ロ、蒙古測量

既定計畫ニ基キ昭和十五年分測量ヲ實施スヘク實行計畫ヲ立案中ニシテ測量區域、測量機關ノ派遣要領等ニ關シテハ現地側ノ要求ヲ斟酌スヘシ

ハ、支那測量

當部トシテハ現占據地域外要地要點ノ地域線影ヲ企圖シ昭和十五年分豫算ヲ以テシテ主トシテ嶺南南部地方ノ地域測量並敵側重要地域ノ路線測量ヲ具體化セントシテ主トシテ占據地

B

軍事的取扱法ヲ緩和シ作戰上ニ不便ヲ來ササル如ク軍事秘密ニスルヲ一般トス對支作戰用地圖ハ更ニ秘度ヲ低下シ作戰地ニアリテ行動スル部隊ニ限り部外秘扱トナシアルモ前記三項目ノ理由ト支那ニ於ケル我作戦上又ハ將來防共駐屯ニ伴フ秘匿地區等ノ未決定等ニ因リ尙全般的ニ秘圖トナシテ依テ各部隊取扱上ノ心算ヘハ他クマテ軍事秘密的ニ嚴重ニシ用濟後ハ燒却又ハ返納スル如クセラレ度

尙取扱法ヲ地域的ニ差異ヲ附シアル現況ハ防諜上極メテ好マシカラサルヲ以テ對支作戰用新地圖整備要領並支那側ヲシテ取締ヲナシムヘキ事項等ヲ併セ考定ノ上地圖秘匿度ヲ速カニ整理シ度、之レニ關シ忌憚ナキ意見ヲ承知致度

四、圖式並註記ニ就テ

文化的地形圖々式ヲ辨シテ戰圖々式ヲ採用スル替ハ陸地測量部ニ於テ多年研究シアルモ未タ成案ヲ得ス

又敵地測量ハ寫真測量ヲ主體トスルヲ要シ而モ實地踏査不可能ナル特性ヲ有スルヲ以テ之レヲ迅速ニ圖化セントセハ在來ノ圖式、註記ニ據リ難キカ故ニ昭和十四年五月空中寫真應急圖化戰用圖々式ヲ制定セリ

本圖式ヲ以テ迅速ニ圖化シ戰機ニ投セシメ情報ノ入手セラルルニ及ビ地誌資料ヲ詳記シテ作戰ノ要求ニ應セシメントセシモノナリシカ更ニ研究シ實際ニ合ハスルモノト致度シ

尙一般地形圖ト關連シ地誌圖ノ圖式、註記モ亦大イニ改訂ノ要アリ

C

ルモノト認メアリ殊ニ詳細ナル情報ヲ得ルニ從ヒ各國ノ特殊事情
 ヲ考ヘ更ニ完全ナルモノヲ制定スヘキモノナリト思料ス
 之等ニ關シ現地圖ニ於テモ研究セラレ度
 其地圖ノ積極的入手（鹵獲）ニ努力セラレ度
 未入手區域ハ假ヘ一枚ノ鹵獲圖ト雖モ價值大ナリ故ニ各部隊ニ是
 レカ實施ヲ特ニ獎勵スルト共ニ大規模ノ戰鬥ヲ計畫スル場合ハ豫
 メ司令部自ラ挺身鹵獲隊（假名）ヲ編成派遣スルヲ可トス
 入手地圖ノ貴重ナル所以ト若シ入手セハ之レヲ速カニ上級司令部
 ニ送付スル件ハ更ニ普及徹底セシメ入手地圖ヲ有效ニ利用スル如
 ク指導セラレ度
 尙現地圖ニ於テ應急複製セシ原圖（入手圖）ハ速カニ大本營ニ
 送付セラレ度
 謀略等ニ依ル買収ニモ努メラレ度其重複ヲ避クル爲從來入手シタ
 ル地域ヲ印刷シ參考ノ爲配布ス
 六支那測量ニ關スル文獻（支那個ノ覆纂シタルモノ）ノ入手ニモ努
 力セラレ度
 是レカ爲新作戰ニ依リ占領シタル重要都市ニ於テハ速カニ其ノ測
 量局等ヲ點檢整理スルコト必要ナリ各部隊ヲ無統制ニ該局ニ進入
 セシムル時ハ貴重ナル文獻地圖ヲ散逸若クハ燒失スルノ恐れアル
 點ニ留意セラレ度
 七各軍配屬測量班附高等文官ノ充實ニ就テ
 總軍司令部、北支那方面軍ノ外當分補充ハ不可能ナルヲ以テ之カ

D

缺ヲ補フ一時的便法ヲ考慮中ナリ
 八各軍配屬測量班附員若クハ測量手中陸地測量部修技所聽生若
 クハ學生候補者受験ニ關シテハ現地軍ノ希望ニ沿フ如ク目下研究
 中ナリ
 一六

石井素介先生旧蔵の『参謀本部大陸第七課作成の兵要地誌図資料』 —解説と詳細目録—

解説：小林 茂

目録：多田隈健一・顧 立舒

石井素介先生が大阪大学文学研究科人文地理学教室にご寄贈下さった「参謀本部大陸第七課作成の兵要地誌図資料」は、外邦図研究資料としてだけでなく、第二次世界大戦末期における兵要地誌編集作業の一端を示すとともに、学徒動員に関する資料としても重要な意義をもつと考えられる。以下、こうした多様な方面からの本資料の活用を意識して、簡単な解説と詳細目録を示すことにする。

1945年当時、東京大学理学部地理学科の学生であった石井先生が、参謀本部で研究動員学徒として各種の作業に従事された経過については、すでに外邦図研究ニューズレター6号、7号に掲載の文章（石井2009; 2010）にくわしい。またこれらには、本資料の一部の作製過程に関する記述もあり（石井2009: 55-57）、他に得がたい資料となっている。本資料について関心をもたれる方は、まずこれらを参照されることをおすすめする。

関連して、本資料を考えるに際し関心をもたれるのは、第二次世界大戦末期に大学生が参謀本部で兵要地理の研究に従事した背景である。この時期に学徒動員として、多くの学生が各種の作業（勤労働員）に従事したことはよく知られているが、「研究動員学徒」とはどのようなものであったのだろうか。

この点に関心をもって『東京大学の学徒動員・学徒出陣』（東京大学史史料編集室1998）を参照したが、「研究動員学徒」に関する記述や資料を見つけることができなかった。ただし同書の「学徒動員先一覧」の1945年の項目には、理学部地理学科3年生の学生3名の動員があらわれ、動員先・実施機関とも不明であるが、石井先生の動員との関係がうかがわれる（東京大学史史料編集室1998: 94-95）。

つぎに石井先生の派遣された部署に着いてみておこう。参謀本部第二部は、情報関係の業務を担当する部で、1945年5月当時は第五課～第七課で構成されていた。第五課は「対ソ独などの欧州および印

度以西地域の情報」、第六課は「対英米、英帝国、南北米大陸、アフリカ、南方地域の情報」、第七課は「支那情報」をそれぞれ担当していた（秦編1991: 480-481, 497-500）。第七課に石井先生が配属されたのは、1944年10月から3ヵ月間、旧満洲で現地調査の経験があったからであろう。

ところで、「兵要地誌」とは、軍事的な目的で整備された地誌である。第二次世界大戦期に至るとさまざまな分野の情報が主に冊子の形で整備されており、そのなかには折り込みの地図が含まれているのがふつうであった（源2009）。詳細目録の「付図関係」の項には、兵要地誌の付属資料として作製されていたと考えられる場合に、簡単な記載を示している。

これに対し兵要地誌図は、地誌的情報を盛り込んだ一枚ものの地図で、1937年以降シベリアや満洲、蒙古、中国大陸について、10万分の1と50万分の1の図をベースマップとして作製されるようになった。ただし、第二次大戦期に戦線が広がると、それ以外にも多彩な縮尺のものが印刷された（小林2003）。詳細目録の縮尺の項をみると、基図の縮尺に左右されてか、さまざまな縮尺の図が見られる。

こうした兵要地誌の付図あるいは兵要地誌図の基図は、石井先生作成の目録にも示されているように外邦図が使用されている。当然のことながら統一的に整備されてきた10万分の1や50万分の1図を基図にしている場合が多いが、100万分の1航空図や30万分の1陸海編合図が使用されているのも注目される。このうち、広域的に交通路を表示するのに航空図が適しているのは理解しやすい。他方、30万分の1陸海編合図の使用は、それが1945年製版と新しいものであったという点からも、もう少し検討をくわえておきたい。

陸海編合図は、第二次世界大戦末期に、陸上に関する地形図と海域に関する海図を組み合わせで作られたもので、琉球列島や伊豆諸島、小笠原諸島、千

島列島では5万分の1の縮尺であるが、ミクロネシアでは10万部の1図もみられる(清水 2005; お茶の水女子大学文教育学部地理学教室 2007: 209)。北海道・本州・九州の海岸部をカバーする「陸海作戦要図」(やはり地形図と海図を組み合わせており縮尺は関東地方が10万分の1のほかは5万分の1)もあわせて、あきらかに連合軍の上陸作戦を意識して作製されたものである。本目録に記載されているものに、国立国会図書館に所蔵されているものを合わせてみると、中国大陸沿岸は30万分の1の縮尺で陸海編合図が整備されたことがわかる。おそらく長大な中国大陸の沿岸を5万分の1の縮尺でカバーすることは困難だったからであろう。

こうした点に留意して、石井先生作製の目録の1号「江北沿岸區空海基地概見圖」の説明をみると、海からの艦艇の侵入も考慮していることが明らかで、30万分の1陸海編合図を基図に、さらに他の情報を加えて兵要地誌図を作ろうとしていたことがうかがえる。この点は目録の2号についても同様であろう。

このようにみえてくると、本資料を構成する各種の地図や表は、第二次世界大戦末期という状況下で作製されていたことがうかがわれる。1,2号以外の資料についても、こうした状況をよく理解して検討をくわえる必要がある。

なお石井先生は、本資料を整理される際、資料14に含まれる資料の裏紙から、「昭和15年度と推定される日本陸軍の地図整備計画」(仮題)に掲げたタイプ印刷の文章を発見された。4丁(計8頁)のうち、AとBの間に2丁(4頁)の欠落があるが、当時の参謀本部で地図の整備についてどのように考えられていたかを示す貴重な資料である。中国大陸における日本軍占領地域外の要地の空中写真撮影、地図の積極的入手の勧め、中国側の測量に関するデータの確保に関する記述はとくに興味ぶかい。今後、類似の史料の探索も試みるべきであろう。石井先生のご配慮に感謝したい。

ところで石井先生は、本資料にみられる兵要地誌図作成作業には、地理学者はほとんど参与しておらず、その学術的レベルは余り高いものではなかったことを指摘されている(石井 2010: 30-31)。第二次世界大戦中のアメリカやイギリスで、戦場の地理情

報の整備に多数の地理学者が動員されていたのと比較すると、日本の地理学者のこの種の業務への関与は、非常に少ないことが確認できる。第二次世界大戦の末期になって、わずかながらにはじまったという程度である(渡辺正氏所蔵資料編集委員会編 2005; 小林 2011: 247-249)。今後は、こうした状況を明確に示すものとしても本資料を位置づけつつ、さらに検討をすすめる必要がある。

文献

- 石井素介 2009. 「終戦前後の参謀本部「研究動員学徒」時代の回想—「皇軍」における「兵要地理」のあり方と応用地理学の立場」外邦図研究ニューズレター6: 47-60.
- 石井素介 2010. 「戦時下「皇軍」の「兵要地誌」と地理学者の関与をめぐって」外邦図研究ニューズレター7: 29-32.
- お茶の水女子大学文教育学部地理学教室 2007. 『お茶の水女子大学所蔵外邦図目録』お茶の水女子大学文教育学部地理学教室.
- 小林茂 2003. 「兵要地誌図(大阪大学文学研究科人文地理学教室蔵)目録」外邦図研究ニューズレター1: 43-46.
- 小林茂 2011. 『外邦図—帝国日本のアジア地図』中公新書.
- 清水靖夫 2005. 「第二次世界大戦末期の内邦諸図について」外邦図研究ニューズレター3: 52-60.
- 東京大学史史料編集室 1998. 『東京大学の学徒動員・学徒出陣』東京大学出版会.
- 秦郁彦編 1992. 『日本陸海軍総合事典』東京大学出版会.
- 源昌久 2009. 「日本の兵要地誌に関する一研究—中国地域を中心に」小林茂編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域—「外邦図」へのアプローチ』大阪大学出版会, 256-304.
- 渡辺正氏所蔵資料編集委員会編 2005. 『終戦前後の参謀本部と陸地測量部—渡辺正氏所蔵資料集』大阪大学文学研究科人文地理学教室.

日清・日露戦争期に臨時測図部が中国大陸で作製した地形図（大阪大学蔵）

—解説と目録—

解説：小林 茂

目録：小嶋 梓・多田隈健一・顧 立舒

日本陸軍と陸地測量部は、日清戦争期に数百人規模の測量要員からなる「臨時測図部」を編成して、1895年2月～1896年8月に朝鮮半島・中国大陸・台湾の測量をおこない、地形図を作製した。またその後も小グループの測量要員を朝鮮半島・中国大陸に断続的に派遣し、日露戦争期の1904年6月になると再度「臨時測図部」を編成して、朝鮮半島と中国大陸で測量をおこなった。この活動は、日露戦争終結後も継続され、1913年3月によりやく終了することになった（小林2011: 97-109, 136-158）。

日清戦争期に編成された臨時測図部は第一次臨時測図部、日露戦争期に編成された臨時作図部は第二次臨時測図部と呼ばれ、東アジア地域で日本がはじめて本格的な測量活動を大規模におこなった組織として、その実態が注目される。またこれによって作製された地形図についても、初期の大縮尺図として、とくに韓国や台湾で研究が開始されている。本稿掲載の目録はこうした研究状況をふまえて準備されたもので、以下では現在までほとんど検討されていない中国大陸に関するこの時期の地形図の一部を紹介するとともに、それを通じて、この時期の臨時測図部の活動を検討してみたい。

以下、まず臨時測図部に関連する資料について紹介したあと、この時期に作製された地図に関する研究をレビューし、これをふまえて目録掲載の図の特色を検討する。

1. 第一次・第二次臨時測図部の活動に関する資料

日清・日露戦争期の臨時測図部に関する資料として最もまとまったものは、『外邦測量沿革史 草稿』（小林解説2008a; 2008b: 1-252）に掲載された各種文書類の写しである。これは、1907年頃以降臨時測図部に通訳として勤務した岡村彦太郎が、支那駐屯軍嘱託として、1936年以降に編集したもので、原資料をよく反映すると考えられるが、とくに日清戦争

期と日露戦争期については断片的なものにとどまっている（小林2009）。岡村が編集に着手した時点で、すでにこの時期の臨時測図部に関する資料の多くは失われていたとみるべきであろう。

これを補う重要資料が、岡村も参加した「外邦測量の沿革に関する座談会」（1936年）における古参の測量技術者（測量師）および陸軍将校（藤坂松太郎）の回想で、アジア歴史資料センターがインターネットを通じて公開している（Ref. C04121449200）。類似の座談会は1944年はじめ頃にもおこなわれ、「明治三十七八年戦役と測量」というタイトルで、陸地測量部の内部雑誌であった『研究蒐録 地図』に掲載された（野坂ほか1944）。ただしこれは、日露戦争期に焦点を絞っている。

その他の資料として挙げておくべきは、『陸地測量部沿革誌』（陸地測量部1922）と『外邦兵要地図整備誌』（高木著・藤原編1992）となるが、編年の記載を主体とするため、第一次および第二次臨時測図部関係の記載は多くない。また、『明治廿七八年日清戦史、第8巻』（参謀本部編纂1907: 131-134）には、短いながら日清戦争開始期の陸地測量部から第一軍と第二軍に派遣された測量班と第一時臨時測図部の活動経過を示している。

以上のような資料の状況を考慮すると、この時期の臨時測図部の活動に対しては、その作製図も重要な手がかりになることが理解される。各図幅の測図時期や精度を検討することにより、その実態にアプローチできるわけである。

2. 第一次・第二次臨時測図部の作製図に関する従来の研究

第一次・第二次臨時測図部が作製した地図の研究においては、まず清水靖夫のパイオニアの仕事（清水1982; 1986; 2009a; 2009b）が重要である。おもに国立国会図書館に収蔵されている地形図を丹念に

調査し、台湾と朝鮮半島におけるこの時期の地図の概要を把握した。この場合、同時期に中国大陸について作製された地図について検討されていないのは、国立国会図書館にそれがほとんど収蔵されていないことによると考えられる。

他方台湾では、黄武達が台湾における地図作製史の概要を解説するとともに、『明治廿七八年日清戦史、第7巻』（参謀本部編纂 1907）の付図などを手がかりに日清戦争とそれに続く時期の地図を探索して、都市部の2万分の1地形図（臨時測図部・陸地測量部刊）の一部についてリプリントを刊行した（黄 1996a; 1996b）。台湾ではまた、魏徳文の精力的な古地図の収集も重要である。この収集資料と清水の研究をふまえて、林（2005）は、この時期以降の台湾に地図について概観した。これらの研究は、日本統治期の台湾の地図について広い視野から検討する『測量台湾—日治時期繪製台湾相關地図 1895—1945』の記載にも反映されている（魏ほか 2008: 22-30）。これらに基づきつつ、さらに黄清琦は、日清戦争期とそれに続く時期に作製された地形図に焦点を当て、残存する図を探索するとともに、多面的に検討する論文を発表している（黄 2010）。

韓国でも、清水靖夫の研究（清水 1986）をふまえながら、南榮佑が日清・日露戦争期に朝鮮半島について作製された地形図である「略図」のリプリントを『旧韓末 韓半島 地形図』というタイトルで刊行している（南編 1996）。これに付された解説の和訳は、すでに『外邦図研究ニューズレター』4号に掲載しているので参照されたい（南 2006）。南らはその後も関連する論考を発表して、その今日における学術的意義を検討している（南・李 2009）。

一方、谷屋郷子（現姓岡田）は、陸地測量部にあった外邦図をうけつぐ外邦図コレクション（現在は自衛隊中央情報隊所管で非公開）の目録（国土地理院蔵の『国外地図目録』と『国外地図一覧図』）を使って、測図年の記されていない上記「略図」の測図年を示した（谷屋 2004; 岡田 2009）。これによって、朝鮮半島における日清・日露戦争期の日本による測量活動の展開の概況が把握できることとなった。

台湾と韓国におけるこの時期の地図の研究で共通するのは、土地調査事業に基づいて作製された地形

図（臨時台湾土地調査局による「台湾堡図」[2万分の1]や朝鮮総督府臨時土地調査局による5万分の1図）をさかのぼる時期の地図とこれらを位置づけ、その学術的意義を評価しようとしている点である。土地調査事業によって作製された地図に見える景観は、すでに植民地統治のさまざまな政策が反映されているのに対し、日清戦争期とそれに続く時期の地形図には、植民地統治開始以前の景観を広範囲に示すものと考えられているわけである。

このような点で、この時期の地形図は、それぞれの地域の地図史のなかで独自の位置を占めていることが強く意識されていることがあきらかである。この点は中国大陸に関する地形図についても同様と思われるが、さらに検討を要するところである。つぎに本稿の目録に示す地図について、特色を述べたい。

3. 日清・日露戦争期に臨時測図部が中国大陸で作製した地形図の特色

本稿の目録に示す地図は、4つの地図群に分かれているが、いずれも同一の古書店から購入したもので、紙質や印刷はよく類似している。印刷は全体に粗く、漢字地名につけられた、現地での発音を示すと考えられるルビが読みにくい場合が多い。とくに『明治廿七八年日清戦史』にみえる、同一地域の付図（2万分の1図で、基本的に同じ原図によったとおもわれるもの。ただし漢字地名にルビを付さない）と比較すると、その粗さがめだつ。

4つの図群は、「二万分一得利寺近傍」、「二万分一大石橋及蓋平近傍」、「九連城近傍」、「二万分一遼陽近傍」で、いずれも縮尺は2万分の1である。このうち「二万分一大石橋及蓋平近傍」と「九連城近傍」については、日清戦争期に測図されたものを含むが、「二万分一得利寺近傍」と「二万分一遼陽近傍」ではすべて日露戦争期に測図されたものになるのは、日清戦争に際して、得利寺や遼陽付近では戦闘が行われなかったからと考えられる。

各図群に付された番号から、いずれの図群についても欠落している図幅があることがわかるが、幸い1940年3月発行の「外邦局地図一覧図（其一）」（大阪大学蔵、小林・長谷川・波江 2010: 58 参照）には、全13（ただし延べ15）の2万分の1地形図群の一

覧図が掲載されており、上記4図群も含まれている。これによって4図群の全貌が把握できるが、以下ではまず全13の図群について紹介しておきたい。

- (1) 北樺太アレキサンドロフ近傍
- (2) 山海関近傍
- (3) 威海衛近傍
- (4) 天津近傍
- (5) 保定近傍
- (6) 漢陽以西漢水右岸地区
- (7) 香港近傍
- (8) 遼陽近傍
- (9) 得利寺近傍
- (10) 鳳凰城近傍
- (11) 九連城近傍
- (12) 拆木城近傍 大石橋及蓋平近傍 營口近傍
- (13) 海城近傍

これらの地名をみると、北樺太・山海関・威海衛・天津をはじめとして、日清戦争期～日露戦争期に戦闘あるいは地図作製がおこなわれたことが確認できる地域が少なくない（小林 2011: 93-109, 121-158 参照）。これらについて、ひとつひとつ検討する余裕がないが、2万分の1地形図が、この時期広く作製された可能性があることを指摘しておきたい。台湾では5万分の1図のほか、2万分の1図が広く作製されているし（黄 2010）、朝鮮半島でも北東部について日露戦争直後に2万分の1地形図が計171図幅整備されている（清水 2009b: 179-181）。またこの時期には、日本国内でも2万分の1の縮尺で地形図（正式二万分一地形図）の整備が進められたことも関与している可能性が大きい。

さて、上記「外邦局地図一覧図（其一）」所載の一覧図を参考に作成したのが図1～4である。これらで網掛けを施しているのは、購入した地図に含まれていなかったものである。「二万分一得利寺近傍」をのぞいた3図群については、ほぼ全図幅がそろっていることがわかる。

このうち「二万分一大石橋及蓋平近傍」と「九連城近傍」には、すでに触れたように、日清戦争時に測図されたものが含まれているが、日露戦争時に測図されたものも多く、この両者については、日清戦争時の測図を核に、日露戦争時に測量域を拡大した

⑮ 趙家屯 (不明, 1905)	⑪ 陳家屯 (不明, 1905)	⑦ 得利寺 (不明, 1905)	③ 四平街 (不明, 1905)	
⑮ 榆樹房 (不明, 1905)	⑫ 金斗房 (不明, 1905)	⑨ 曲家店 (不明, 1905)	④ 梁家屯 (1905, 1905)	① 劉家隈子 (1905, 1905)
⑰ 南家屯 (不明, 1905)	⑬ 三家子 (不明, 1905)	⑨ 炸子窑 (不明, 1905)	⑤ 沙泡子 (不明, 1905)	② 張家屯 (1905, 1905)
	⑭ 瓦房店 (不明, 1905)	⑩ 孤家子 (不明, 1905)	⑥ 候家屯 (不明, 1905)	

図1：二万分一得利寺近傍

	⑮ 牛家屯 (1905, 1905)		⑦ 虎庄屯 (1905, 1905)	① 鄆家堡子 (1905, 1905)
	⑮ 唐旗堡 (1895, 1905)	⑬ 黃大人屯 (1895, 1905)	⑨ 大石橋 (1905, 1905)	② 平二房 (1905, 1905)
⑳ 二道溝 (1895, 1905)	㉑ 大平山 (1895, 1905)	⑭ 牛心山 (1895, 1905)	⑨ 青龍山 (1905, 1905)	③ 青寨子 (1905, 1905)
	㉒ 趙家窩棚 (1905, 1905)	⑮ 唐王山 (1905, 1905)	⑩ 李家屯 (1905, 1905)	④ 湯池 (1905, 1905)
㉓ 胡家屯 (1895, 1905)	㉔ 蓋平 (1895, 1905)	⑮ 青石関 (1895, 1905)	⑪ 沈家屯 (1905, 1905)	⑤ 高家屯 (不明, 1905)
㉕ 轉山子 (1905, 1905)	㉖ 老爺廟 (1895, 1905)	⑰ 大煖泉 (1895, 1905)	⑫ 方家屯 (1905, 1905)	⑥ 小廟溝 (1905, 1905)

図2：二万分一大石橋及蓋平近傍

⑦ 老古洞 (1904, 1904)	④ 大樓房 (1894, 1895)	① 虎山 (1894, 1896)	
⑨ 壁柴溝 (1904, 1904)	⑤ 九連城 (1894, 1895)	② 義州 (1894, 1895)	東部補足② 松山洞 (1904, 1904)
⑨ 帽魁山 (1904, 1904)	⑥ 沙河鎮 (1894, 1898)	③ 白馬山 (1898, 1898)	東部補足③ 加老洞 (1904, 1904)
	南方補足③ 立岩洞 (1904, 1904)	南方補足② 新浦 (1904, 1904)	南方補足① 替馬山 (不明, 1904)

図3：二万分一九連城近傍

⑮ 佟二堡 (1905, 1905)	⑭ 河公堡 (1905, 1905)	⑨ 南烟台 (1905, 1905)	④ 東烟台 (1905, 1905)	① 烟台炭鉞 (1905, 1905)
㉑ 大沙嶺 (1905, 1905)	⑮ 佟庄子 (1905, 1905)	⑩ 張台子 (1905, 1905)	⑤ 黑英台 (1905, 1905)	② 大窑 (1905, 1905)
㉒ 蛤蜊河子 (1905, 1905)	⑮ 遼陽 (1905, 1905)	⑪ 東京陵 (1905, 1905)	⑥ 下平州 (1905, 1905)	③ 英守堡 (1905, 1905)
㉓ 首山堡 (1905, 1905)	⑰ 早飯屯 (1905, 1905)	⑫ 峨嵋庄 (1905, 1905)	⑦ 小屯子 (1905, 1905)	
㉔ 沙河 (1905, 1905)	⑱ 羊乎勾 (1905, 1905)	⑬ 望報台 (1905, 1905)	⑧ 孫家寨 (不明, 1905)	

図4：二万分一遼陽近傍

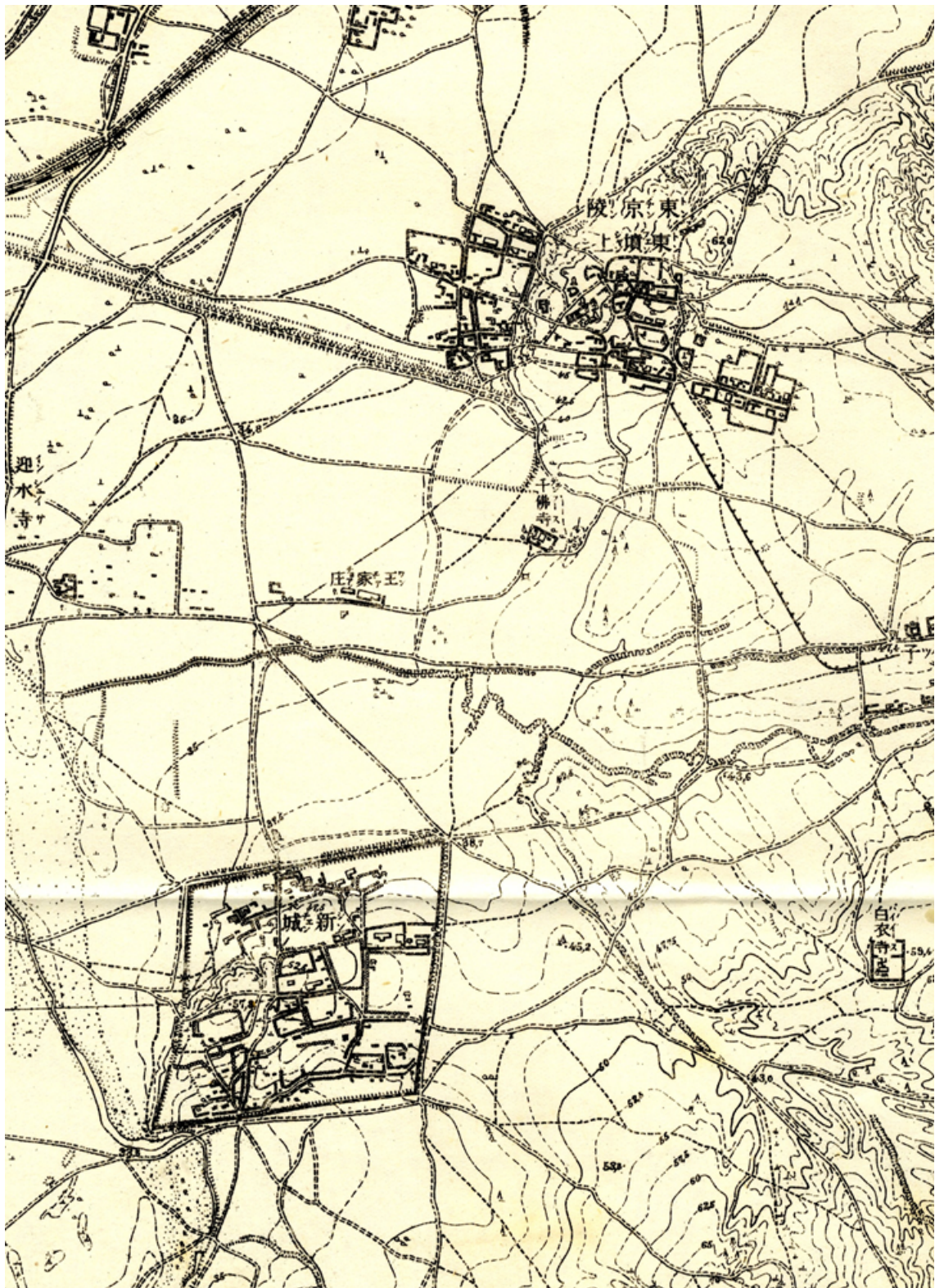


図5：二万分一遼陽近傍図第119号「東京陵」（1904年11月測図）
の東京陵と東京城（新城）[97%に縮小]

ことが推測される。その場合、とくに九連城近傍について、第一次臨時測図部の活動開始以前の 1894 年に測図されたものがあるのは、これに先だって派遣された第一軍の測量班によるものと考えられる（上記「外邦測量の沿革に関する座談会」[1936 年]の豊田四郎と別府八百衛の回想および小林 2011:93-97 を参照）。

またこれらの 2 図群に含まれる図について、『明治廿七八年日清戦史』の付図（2 万分の 1）との対応関係をみると、多くは同一の図を原図としており、これらの地形図のための測図が戦史作製を意識して進められたことをうかがわせる。「二万分一遼陽近傍」の「遼陽」図幅に、遼陽会戦に際してロシア軍が構築した堡壘群が克明に記載されているのも、このような意図をうかがわせる。

なお、あきらかに戦史を意識したこの時期の測量として、日露戦争の旅順陥落後におこなわれた 5 万分の 1 図の測量がある。日露戦争における最も重要な陸戦であった旅順包囲戦を記念するもので、これに基づいて地形模型が作製された（藤森ほか 2011）。こうした点からも、臨時測図部の地図作製と戦史との関係については、さらに検討する必要があることが理解されよう。

以上のような図群に関連してもうひとつ言及しておきたいのは、その地形図のなかには、現在史跡として調査の対象となっている「東京城」や「東京陵」（細谷編 1991: 67-72; 承・杉山 2006）について、詳細な地図情報を提供するものがあるという点である（図 5）。このように点からも、各方面からの学術的利用が待たれる。

文献

岡田郷子 2009. 「朝鮮半島の『略図』の測図年別分布」小林茂編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域—「外邦図」へのアプローチ』大阪大学出版会, 81.
魏徳文・高傳棋・林春吟・黄清琦 2008. 『測量台湾—日治時期繪製台湾相關地図 1895—1945』国立台湾歴史博物館・南天書局.
黄清琦 2010. 「〈1895 年台湾地形図〉之研究」『歴史台湾』1: 62-117.

黄武達 1996a. 『日治時代（1895-1945）台湾近代都市計画之研究、論文集(1)付図』台湾都市史研究室.
黄武達 1996b. 『日治時代（1895-1945）台湾近代都市計画之研究、論文集(2)付図』台湾都市史研究室.
小林茂 2009. 「解説」『「外邦測量沿革史 草稿」解説・総目次』不二出版, 5-27.
小林茂 2011. 『外邦図—帝国日本のアジア地図』中央公論新社（中公新書）.
小林茂解説 2008a. 『外邦測量沿革史 草稿』第 1 冊、不二出版.
小林茂解説 2008b. 『外邦測量沿革史 草稿』第 2 冊、不二出版.
参謀本部編纂 1907. 『明治廿七八年日清戦史、第 7 卷・第 8 卷』東京印刷株式会社.
清水靖夫 1982. 「台湾の諸地形図について」研究紀要（立教高等学校）13: 1-23.
清水靖夫 1986. 『日本統治機関に作製にかかる朝鮮半島地形図の概要—「一万分一朝鮮地形図集成」解題』柏書房（小林茂編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域—「外邦図」へのアプローチ』大阪大学出版会, 131-183, 2009 に加筆して掲載）
清水靖夫 2009a. 「台湾の諸地形図について」小林茂編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域—「外邦図」へのアプローチ』大阪大学出版会, 109-130.（清水[1982]に大幅に加筆）
清水靖夫 2009b. 「日本統治機関に作製にかかる朝鮮半島地形図の概要」小林茂編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域—「外邦図」へのアプローチ』大阪大学出版会, 131-183.（清水[1986]に大幅に加筆）
承志・杉山清彦 2006. 「明末清初マンジュ・フルン史蹟調査報告—2005 年遼寧・吉林踏査行」『滿族史研究』5: 55-84.
高木菊三郎著、藤原彰編・解説 1992. 『外邦兵要地図整備誌』不二出版.
谷屋郷子 2004. 『朝鮮半島の外邦図の作製過程』大阪大学文学部卒業論文.
南榮佑編 1996. 『旧韓末 韓半島 地形図』図書出版成地文化社.
南榮佑 2006. 『「旧韓末 韓半島 地形図」解説』『外邦図研究ニューズレター』4: 89-108.

日清・日露戦争期に臨時測図部が中国大陸で作製した地形図（大阪大学蔵）の目録

タイトル	シリーズ	測図時期	製版時期	修正等	発行時期	測図機関	製版機関	発行機関	備考
劉家隈子	二万分一得利寺近傍圖第一號(共十七面)	1905年2月	1905年5月		1905年6月1日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
張家屯	二万分一得利寺近傍圖第二號(共十七面)	1905年2月	1905年5月		1905年6月1日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
四平街	二万分一得利寺近傍圖第三號(共十七面)	1905年2月	1905年5月		1905年6月8日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
梁家屯	二万分一得利寺近傍圖第四號(共十七面)	1905年2月	1905年5月		1905年6月8日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
沙泡子	二万分一得利寺近傍圖第五號(共十七面)				1905年				所蔵せず。
候家屯	二万分一得利寺近傍圖第六號(共十七面)				1905年				所蔵せず。
得利寺	二万分一得利寺近傍圖第七號(共十七面)				1905年				所蔵せず。
曲家店	二万分一得利寺近傍圖第八號(共十七面)				1905年				所蔵せず。
炸子窑	二万分一得利寺近傍圖第九號(共十七面)				1905年				所蔵せず。
孤家子	二万分一得利寺近傍圖第十號(共十七面)				1905年				所蔵せず。
陳家屯	二万分一得利寺近傍圖第十一號(共十七面)				1905年				所蔵せず。
金斗房	二万分一得利寺近傍圖第十二號(共十七面)				1905年				所蔵せず。
三家子	二万分一得利寺近傍圖第十三號(共十七面)				1905年				所蔵せず。
瓦房店	二万分一得利寺近傍圖第十四號(共十七面)				1905年				所蔵せず。
趙家屯	二万分一得利寺近傍圖第十五號(共十七面)				1905年				所蔵せず。
榆樹房	二万分一得利寺近傍圖第十六號(共十七面)				1905年				所蔵せず。
南家屯	二万分一得利寺近傍圖第十七號(共十七面)				1905年				所蔵せず。
鄭家堡子	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第一號	1905年2月	1905年4月		1905年5月18日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
平二房	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第二號	1905年2月	1905年4月		1905年5月18日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
青寨子	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第三號	1905年2月	1905年4月		1905年5月18日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
湯池	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第四號	1905年2月	1905年4月		1905年5月18日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
高家屯	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第五號				1905年				所蔵せず。
小廟溝	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第六號	1905年2月	1905年4月		1905年5月9日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
虎庄屯	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第七號	1905年2月	1905年4月		1905年5月18日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
大石橋	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第八號	1905年2月	1905年5月		1905年5月18日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
青龍山	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第九號	1905年2月	1905年4月		1905年5月18日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
李家屯	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第十號	1905年2月	1905年4月		1905年5月18日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
沈家屯	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第十一號	1905年2月	1905年4月		1905年5月18日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
方家屯	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第十二號	1905年2月	1905年4月		1905年5月18日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
黃大人屯	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第十三號	1895年	1905年4月	1905年2月修正増補	1905年5月18日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
牛心山	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第十四號	1895年	1905年4月	1905年2月修正増補	1905年5月18日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
唐王山	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第十五號	1905年2月	1905年4月		1905年5月18日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
青石関	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第十六號	1895年	1905年5月	1905年2月修正増補	1905年5月18日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
大燧泉	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第十七號	1895年	1905年4月	1905年2月修正増補	1905年5月18日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
牛家屯	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第十八號	1905年2月	1905年4月		1905年5月9日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
唐旗堡	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第十九號	1895年	1905年4月	1905年修正増補	1905年5月18日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
大平山	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第二十號	1895年	1905年4月	1905年2月修正増補	1905年5月18日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
趙家高棚	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第二十一號	1905年2月	1905年4月		1905年5月9日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
蓋平	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第二十二號	1895年	1905年4月	1905年2月修正増補	1905年5月18日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
老爺廟	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第二十三號	1895年	1905年4月	1905年2月修正増補	1905年5月18日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
二道溝	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第二十四號	1895年	1905年4月	1905年2月修正	1905年5月9日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
胡家屯	二万分一太石橋及蓋平近傍圖第二十五號	1905年2月	1905年4月		1905年5月18日	臨時測圖部	陸地測量部	参謀本部	
松山洞	九連城近傍圖之二號東部補足圖	1904年6月	1904年7月		1904年7月25日	第一臨時築城團	陸地測量部	参謀本部	東側4分の1が空白。
加老洞	九連城近傍圖之三號東部補足圖	1904年6月	1904年7月	1904年10月修正,12月再修正	1904年7月25日	第一臨時築城團	陸地測量部	参謀本部	東側4分の1が空白。
替馬山	九連城近傍圖南方補足圖之一(推測)				1904年				所蔵せず。
虎山	九連城近傍圖一號	1894年	1895年		1896年8月28日	第一軍司令部	陸地測量部	参謀本部	
義州	九連城近傍圖二號	1894年	1895年		1895年8月28日	第一軍司令部	陸地測量部	参謀本部	「高程ハ沙河鎮河岸ノ水面ヲ五メートル假定シ米突ニテ示ス 圖式ハ明治二十七年定ムル所ノ迅速測圖原圖式ニ據ル」との記載有り。
白馬山	九連城近傍圖三號	1898年	1898年	1904年修正	1898年10月27日	大日本帝國陸地測量部		参謀本部	
新浦	九連城近傍圖南方補足圖之二	1904年10月	1904年12月		1904年12月12日	第一臨時築城團	陸地測量部	参謀本部	

大槌房	九連城近傍圖四號	1894年	1895年		1895年8月28日	第一軍司令部	陸地測量部	參謀本部	「高程ハ沙河鎮河岸ノ水面ヲ五米ト假定シ米突ニテ示ス 圖式ハ明治二十七年定ムル所ノ迅速測圖原圖式ニ據ル」との記載有り。
九連城	九連城近傍圖五號	1894年	1895年		1895年8月28日	第一軍司令部	陸地測量部	參謀本部	「高程ハ沙河鎮河岸ノ水面ヲ五米ト假定シ米突ニテ示ス 圖式ハ明治二十七年定ムル所ノ迅速測圖原圖式ニ據ル」との記載有り。
沙河鎮	九連城近傍圖六號	1894年	1898年	1904年10月修正	1898年10月27日	大日本帝國陸地測量部		參謀本部	「高程ハ沙河鎮河岸ノ水面ヲ五米ト假定シ米突ニテ示ス」との記載有り。
立岩洞	九連城近傍南方補足圖之三	1904年	1904年12月		1904年12月12日	第一臨時築城團	陸地測量部	參謀本部	
老古洞	九連城近傍七號	1904年6月	1904年7月		1904年7月4日	第一臨時築城團	陸地測量部	參謀本部	西側半分が空白。
壁柴溝	九連城近傍八號	1904年8月	1904年8月		1904年7月4日	第一臨時築城團	陸地測量部	參謀本部	北西部が空白。発行時期は誤りと思われる。
帽魁山	九連城近傍九號	1904年8月	1904年8月		1904年8月28日	第一臨時築城團	陸地測量部	參謀本部	南西部が空白。
烟台炭嶺	二万分一遼陽近傍圖第一號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	
大崋	二万分一遼陽近傍圖第二號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	
英守堡	二万分一遼陽近傍圖第三號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	南東部と南西部の南側半分が空白。
東烟台	二万分一遼陽近傍圖第四號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	
黑英台	二万分一遼陽近傍圖第五號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	
下平州	二万分一遼陽近傍圖第六號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	
小屯子	二万分一遼陽近傍圖第七號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	
孫家寨	二万分一遼陽近傍圖第八號				1905年				所蔵せず。
南烟台	二万分一遼陽近傍圖第九號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	
張台子	二万分一遼陽近傍圖第十號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	
東京陵	二万分一遼陽近傍圖第十一號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	
峨嵋庄	二万分一遼陽近傍圖第十二號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	
望報台	二万分一遼陽近傍圖第十三號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	
河公堡	二万分一遼陽近傍圖第十四號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	
修庄子	二万分一遼陽近傍圖第十五號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	
遼陽	二万分一遼陽近傍圖第十六號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	
早飯屯	二万分一遼陽近傍圖第十七號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	
羊平勾	二万分一遼陽近傍圖第十八號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	
修二堡	二万分一遼陽近傍圖第十九號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	
大沙嶺	二万分一遼陽近傍圖第二十號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	
蛤蜊河子	二万分一遼陽近傍圖第二十一號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	
首山堡	二万分一遼陽近傍圖第二十二號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	
沙河	二万分一遼陽近傍圖第二十三號	1904年11月	1905年1月		1905年4月3日	臨時測圖部	陸地測量部	參謀本部	

地図は全てモノクロ。サイズはおおよそ46cm×58cm。

所蔵していない地図のタイトル・シリーズ・発行年は『外邦局地圖一覽圖(其一)』の二万分一得利寺近傍、遼陽近傍、大石橋及蓋平近傍、九連城近傍、遼陽近傍にもとづく。

南榮佑・李虎相 2009. 「韓国における外邦図(軍用秘図)の意義とその学術的意義」小林茂編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域—「外邦図」へのアプローチ』大阪大学出版会, 465-470.

野坂喜代松ほか 1944. 「明治三十七八年戦役と測量」『研究蒐録 地図』昭和19年3月号, 41-54. (小林茂・渡辺理絵解説『研究蒐録 地図、第3冊』不二出版, 41-54, 2011に再録)

藤森衣子・三崎護・中村優希・鈴江文子・後藤敦史・小林茂 2011. 「アメリカ議会図書館、手描き旅順

要塞砲台図および5千分の1地形図—解説と目録」『外邦図研究ニューズレター』8: 23-43.

細谷良夫編 1991. 『中国東北部における清朝の史跡—1986-1990年』東洋文庫中央アジア・イスラム研究室.

陸地測量部 1922. 『陸地測量部沿革誌』陸地測量部.

林春吟 2005. 「日本植民地期台湾における地形図に関する研究」『現代台湾研究』28: 1-23.